

森林が支えてくれる  
私たちの生活  
—SDGsと森林—

# 森林による文化的サービス①

— 登山 —

土屋 俊幸 Tsuchiya Toshiyuki 東京農工大学名誉教授

専攻は「林政学」。2019年から現在に至るまで、林政審議会の会長を務める。ほかに、(一財)林業経済研究所所長や、(公財)日本自然保護協会執行理事を兼任している

今回取り上げるのは、森林による生態系サービスのうち、「文化的サービス」です。文化的サービスとは「文化を育み人間生活を豊かにしている審美的、精神的、教育的サービス」のことです。人間が毎日生きていくために必須のものではありませんが、現代社会では、人間が人間らしく生きていくために欠かせないものとなりつつあります。特に、新型コロナウイルスの世界的な蔓延<sup>まんえん</sup>のなかで、私たちは自然、そして森林と触れ合うことのありがたさ、楽しさを改めて認識することになりました。ここでいう「森林」は、うっそうとした本来の森林である必要は必ずしもなく、都市内の小さな公園にある樹林でも、お寺や神社の境内林でもよく、その地域、その人に合ったさまざまな森林と人々のかかわり方が存在するのだと思います。

## 観光レクリエーション

さて、ここでは、まず観光レクリエーションについて取り上げます。おそらく、読者の皆さんの多くは5月の連休に自然の豊かな地域に出掛けられ、自然を楽しまれたと思います。そこでの自然、森林から授けられるのが生態系サービスのうちの文化的サービス、特に「観光レクリエーション」に関するサービスです。

実は、森林の文化的サービスが社会から明確に認識され、その振興のための施設や制度が行政によって作られ、またその研究が組織的に行われるようになったのは、日本においてはそれほど前からではありません。別の言い方をすれば、国民が森林の文化的サービスを意識して享受するようになったのはつい最近のことなのです。

確かに造園学、森林風致計画学などの学問分野は比較的早くから成立したのですが、この名前で分かるように、森林を景観として見る視点からの研究が主で、森林の中でのさまざまな人間の活動そのものや活動に必要な施設の研究、施設や森林の配置の計画、さらにはそうした人間の活動や施設の開発をコントロールし、よりよいものにしていく政策・制度についての研究は大きく欧米に遅れて現在に至っています。

## 「登山」の歴史

私の研究者としての専門は、まさにこの分野です。まずは、日本の観光レクリエーションを時系列的に概観することから始めましょう。ここでは「登山」を代表として取り上げます。

### 1. 宗教登山

日本の山岳は、山頂付近の高山帯を除くとほとんどが森林に覆われており、登山は、森林の中を歩くレクリエーションととらえられるのですが、少なくとも、その始まりはレクリエーションとはかなりかけ離れたものでした。皆さんは「修験道<sup>しゅげんどう</sup>」について聞いたことがありますか？7、8世紀頃に役小角<sup>えんの おづぬ</sup>が始めたと伝わりますが、日本古来の宗教と仏教等が集合した宗教の一派で、修験者たちは、役小角が開いた吉野金峯山<sup>きんぶせん</sup>など人里離れた険しい山(霊山)にこもり、修行として登山を行いました。現在の日本の主だった山岳は、北海道を除いて、ほとんどが修験者による登山の実績があるといわれています。この修験道から大きな影響を受けて、江戸時代になると一般庶民による参詣<sup>さんげい</sup>登山が流行します。富士山、武蔵御岳山<sup>み たけさん</sup>、木曾御嶽山<sup>おんたけさん</sup>、伯耆大山<sup>ほう き だいせん</sup>、

さがみおやま  
相模大山など、秀麗な山容の山が多いのですが、各地に宗教登山の対象となる山岳が存在し、庶民は「講<sup>\*1</sup>」を組織し、集落内で交代で集団登山を行ったのです。この際、「御師<sup>おし</sup>」(富士講/浅間講など)、「先達<sup>せんだつ</sup>」(御嶽講、大山講など)が職業的コーディネーターとして各講の参詣旅行を企画・引率しました。

## 2. 近代登山

近代登山史は、この伝統的な宗教登山の流れとは断絶したかたちで始まります。それは明治維新以降に大挙来日した欧米人による登山です。明治期に外国人の行動制限が解かれると、多くの欧米人が日本各地をさまざまな目的で旅行しました。その中には山岳に興味を持つ者もいて、例えば「近代登山の父」「日本アルプス命名者」と言われているイギリス人W・ウェストンのように、多くの人々が日本の山で登山を楽しみました。山岳をはじめとする日本の自然環境が、欧米人によって高く評価されたことの意義は大きく、西洋に心酔した者が多かった日本のエリート候補(帝国大学をはじめとする大学生)の間に、急速に近代アルピニズム<sup>\*2</sup>が広がることになりました。エリート集団による近代登山と庶民による宗教登山の併存が日本の登山の第二次世界大戦までの一般的なかたちだったのです。

## 3. 戦後の登山ブーム

1941年の第二次世界大戦の勃発以降、観光レクリエーションは「不要不急」の活動として規制の対象となり、さらに戦争末期には国民の多くが生死の境をさまよひ、また敗戦(1945年)後も、食べ、寝ることに精いっぱいでした。ところが1950年代に入ると各地で観光客が見られるようになり、1950年代半ば以降、いわゆる高度経済成長が始まると、人々は一斉に、ものすごい勢いで観光地、自然地に殺到しました。それは「レジャーブーム」といわれ、混雑をものともせず観光地に押し掛けることから「神風レ

ジャー」とも揶揄<sup>やゆ</sup>されました。第二次世界大戦後、現在までの間に、大雑把<sup>おおざっぱ</sup>に言って、登山ブームは3度起きていたといわれていますが、その1回目がこの時期に起こりました。

ブームの直接のきっかけは1956年、ヒマラヤの高峰マナスル山に世界で初めて日本人が登頂に成功したことといわれています。この世界的な高峰に世界に先駆けて日本人が登頂に成功したことは、国内で大きなニュースとなりました。そして、この敗戦国の国民に誇りを取り戻す出来事をきっかけに、登山ブームが起こりました。大学や企業には次々と山岳部やワンダーフォーゲル部が創設され、多くの部員でにぎわいました。谷川岳など、大都市からアクセスがよい高峰では、夜行日帰りで登山をするサラリーマンであふれたそうです。一方、レジャーブームの流れの中で、比較的標高の低い山に軽装で登る「レジャー登山」もこの頃から盛んになりました。

これに対して、第2次ブームは、1994年からのテレビ番組で火が付いたといわれます。1980年代の、いわゆるバブル経済期にはリゾートに人々の関心が向き、登山者は減少しましたが、バブル崩壊後の不況のなかで復活します。作家深田久弥<sup>きこうや</sup>の著した『日本百名山』がバイブルとなり、主に高度経済成長を支えてきた年齢層が中高年齢域に達し、このブームを担いました。いわゆる「日本百名山ブーム」です。

さらに、第3次ブームは、2007年頃から始まりました。きっかけは、アウトドアの大手アパレルメーカーがファッション性と機能性を兼ね備え、若い女性にも身に着けやすい「山スカート」などの販売を開始し、それが爆発的な人気を得たことだといわれています。2009年頃からは若い女性の登山者の呼称としての「山ガール」が広がり、若い登山者が急激に増えました。

戦後の3回の登山ブームをみると、その担い

\*1 神仏を祭り、または参詣する同行者で組織する団体および一種の金融組合または相互扶助組織

\*2 狩猟や信仰目的ではない、山に登ることそのものを目的とする遊びやスポーツとしての登山をいう

手や登山の形態がそれぞれ異なることが分かります。結果として、日本人にとって登山は、幅広い年齢層に広がり、長きにわたって大きな支持を得た野外レクリエーションだといえます。

### 登山のための施設整備・管理の状況

多くの登山者が集中的に特定の山に訪れるようになると、踏圧による登山道の崩壊や登山道外への踏み外しによる植生の破壊、山小屋等の宿泊施設のゴミ、排水、し尿処理の不徹底による環境汚染、さらには人間の侵入による動物等の生息地への影響など、さまざまな負の影響を山岳環境に与えます。SDGs的に考えれば、こうした負の影響を未然に抑える活動が、社会的な取り組みとしてなされる必要があります。ところが、実は、これが非常に心もとない状態なのです。例えば、日本を代表する山岳地域のほとんどを抱える国立公園においても、地域によっては管理者が定まっていない登山道がいまだに存在し、登山道の整備や補修の遅れは利用に支障を来すレベルに達している箇所が非常に多くあります。

また、トイレ問題は深刻で、くみ取り便所などが頂上付近等の限られた場所に設置されているほかは、携帯トイレの利用環境の整備も進んでおらず、清掃や回収作業が行き届かないため、衛生上や周辺環境の汚染の問題を抱えている山域は多くあります。

本来、登山のための施設が適正に整備され、その維持管理が十分に行われて、山、森林に求める自然体験の質が異なるさまざまな登山者が、お互いの利用を邪魔し合うことなく、気持ちよく利用し、期待した体験を得られるためには総合的・広域的な登山道(付帯する宿泊施設、トイレ、道標、ベンチなどを含む)管理の計画が関係

者の合意のもとに作られ、行政等の管理者による、その計画に沿った施設整備・管理、利用が必要です。こうした登山道管理の考え方・手法がROS(Recreation Opportunity Spectrum: 仮に「レクリエーション体験多様性計画法」とする)です。こうした計画が必要なことは、一部の研究者の間では1990年代から知られていたのですが\*3、実際にこの手法を使って公的な計画が作られたのは大雪山(2015年)が初めてで、ごく最近に本格的な計画が屋久島で、また簡略化されたものは妙高連峰で、近い考え方では尾瀬でも作られています。計画作りには合意形成に大変長い時間と努力が必要で、例えば私がかかわった屋久島の場合、正式な検討会ができてから6年かかりましたし、大雪山は、民間の立場からの我々の初めの提案から17年かかっています。

### SDGsの視点から

SDGsについて最後に少し触れてみましょう。ROSの試みは、ゴール15「陸の豊かさを守ろう」に基づく森林の保全と利用の試みですが、特にゴール3「すべての人に健康と福祉を」の健康の機会を多様な利用者に分かち考え方に合致します。また、ゴール6「安全な水とトイレを世界中に」の山岳部における実現であり、管理者に安全管理への十分な配慮を、利用者に安全や生態系保全を意識した利用を求めている意味ではゴール12「つくる責任、つかう責任」にもかわり、多様な関係者の参加による粘り強い合意形成を方針とすることからゴール17「パートナーシップで目標を達成しよう」の実践だと思います。このように、物事をしっかりと考え、総合的に実現していこうとすると、おのずとSDGs的な取り組みになっていくのだと思います。

\*3 八巻一成・広田純一・小野理・土屋俊幸・山口和男「利用者の多様性を考慮した森林レクリエーション計画：ROS概念の意義」『日本林学会誌』(2000年)82巻3号

参考：土屋俊幸「森林の観光レク利用と地域自然管理」志賀和人編著「森林管理制度論」(日本林業調査会、2016年)